

住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1605号 2001年09月10日(月)

《 China as a part of world economy 》

9月8日に上海のホテルで手にした「CHINA DAILY」の別刷り特集には、「APEC TODAY」(今日 APEC)と大きく印刷してありました。そして、その一連の記事の中にはAPEC そのものに関しては「Avoiding global economic slide」(グローバルな景気後退の回避)という見出しが、また中国の世界経済に占める位置に関する海外諸国の懸念に対しては、「‘China threat’ theory groundless」(根拠ない中国脅威論)という記事がありました。

この二つの記事の見出しには、今の世界経済が直面している二つの大きな問題が凝縮されている。先週の世界的な株安は、世界経済の同時不況への懸念の強まりを背景とするもの。当然ながら APEC はこの「slide」(景気の悪化)を回避することを討議した。これは先週末にアメリカの雇用統計が大きく悪化して、ニューヨークの株価が大幅に下げたことから一段と現実味を帯びた。

こうした世界的景気後退の中で囁かれ始めたのが、「中国脅威論」。世界的なデフレの源になり、輸出で他の諸国の競争力を削いでいる、という見方(懸念)。この懸念は、日本にもアメリカにも、そしてアジア諸国にも台頭しつつある。CHINA DAILY の「‘China threat’ theory groundless」という記事は、こうした懸念への中国サイドの反論である。

筆者は先週一週間、重慶、宜昌、武漢そして上海と、中国の安い労働力の供給基地にある都市(重慶など)から、この国ではもっとも先進的な街である上海までを急ぎ足ながら見る機会がありましたので、今回のレポートはその話を中心にします。

体験論に入る前に、「中国脅威論」に対する CHINA DAILY の反論は以下の通りです。

1. 世界的な経済のグローバルイゼーション加速の中で、中国は海外諸国の製品と投資にとって安定した、そして拡大を続ける市場となった。これは、アジア地区全体の発展と繁栄に寄与している
2. 過去20年間に、中国は年間平均で8.3%の成長を達成し、中国の対外貿易は規模で22倍に増えた。中国の対外貿易は、今や世界第9位に位置する。2000年には、中国の貿易額は4743億ドルで、これは1980年の66億ドルから急増といえる。昨年中国の輸入は2251億ドルに達し、この輸入の36%はアジア諸国からだった

- 3 . 過去 20 年間に中国とアメリカの貿易量は毎年 18% ずつ増加した。アメリカと他のアジア諸国は、中国との貿易で大きな利益を受けている。エネルギー、運輸、通信、環境保護などの分野で、中国は諸外国の企業に大きな投資機会を与えている
- 4 . 中国は一貫して国際紛争の解決手段としては武器や威嚇の使用に反対してきたし、1997 年のアジア通貨危機の際には元の切り下げを行わずに近隣諸国の危機脱出を助け、時宜を得た援助を行って責任ある国家であることを立証してきた
- 5 . 「中国脅威論」、特にアメリカの一部の政治家などが好んで口にする脅威論は、根拠のないものであり、興隆する中国は他の諸国にとって何ら脅威ではない

この記事のポイントは、中国は輸入を増やしている、1997 年のアジア通貨危機に対しても「責任ある行動」を取ったというものです。「責任ある国」だから、脅威ではないという主張です。今週はたまたま中国の WTO 加盟を巡る会議も開催されるが、これに関連して 8 日の上海の新聞には米商工会議所の会頭の言葉として、「（中国が WTO に加盟し世界市場に参加することに関連して）我々はまるで出走直前の競走馬のように興奮している」という発言が紹介されていた。

確かにそういう面はあって、例えば長江の名所である山峡の一つ西陵峡の近くにある山峡ダム（2009 年に完成予定）の建設現場を見たのですが、そこで活躍していた建設機械、使われる発電機などは海外製品が多かった。中国では内陸部での鉄道建設など今後も大きなプロジェクトが続く。こうしたプロジェクトは、海外の大手企業にとって大きなビジネスチャンスであることは間違いない。あとで触れますが、携帯電話など民生品の分野でも大きく伸びている分野もある。中国で売られている携帯電話は、モトローラ、シーメンス、ノキアなど大部分が海外諸国製です（日本の会社のシェアはごくわずか）。携帯電話がそうなら、他の民生品でも中国が大きな輸入国になる可能性はある。

〈 pool of cheap labor 〉

しかし、日本の日曜日の日経新聞が報じているとおり、8 日に蘇州で始まった APEC の財務相会合では、根強い「中国脅威論」が聞かれたようです。

APEC の会合そのものは、今年春からの国際経済会議（サミットも含めて）がそうであるように、お題目（構造改革、金融緩和の進展、アメリカ経済の復活など）だけを唱えるあまり意味のないもの。日本の構造改革の進展、アメリカの景気リバウンドへの期待が中身で、このレポートが何回も指摘している通り、そのようなお題目の復唱だけでは世界経済の回復には役立たず、結果的に世界経済の回復にはかなりの時間がかからざるをえないと予想できるものです。

筆者が興味を持ったのは、第一に日本のデフレの背景ともなっている中国の安い賃金が今どうなっているのか。なぜなら、「デフレの震源地」と見られる中国の強い競争力にとって最大の強味となっているのは、安い賃金だからです。第二は、中国が強調し始めている「輸入をする国としての中国」の現状と、今後の展望です。この二つが分ければ、世界経済の今後の姿の描写もかなり違って来る。

実は、中国には去年も行きました。去年の場合は大連、青島、煙台など東北部。今回はかなり内陸部に入った重慶などと、中国で先端に行く上海。中国は広い、実は多様な国で地方によってかなり賃金なども違うのでしょうか。しかし、去年聞いた話と、今年聞いた話はほぼ同じでした。

宜昌のガイドである簡さん（大卒、サッカーばかりしていたと言っていた）の話によると、最近の中国では大卒の普通の月給は600元、24才の会社の寮に入っている彼の給料は800元だということです。1元は15円ですから、大卒の初任給は9000円、簡さんの給料は12000円となる。これは14～5万円行っている日本の大卒新卒給料の15分の一以下です。確かに安い。これは大きな都市の大卒の話です。

対して、依然として中国国民の大部分を占める農村部の農家の収入はもっと少ない。大都市近郊の農家だと年収が1万元に行くのも珍しくないのだが、田舎に行くと年収が300元とかいう家もあるらしい。300元と言えば、5000円にも満たない。物々交換経済だから生きていけるのですが、それにしても依然として中国が低賃金国であることは間違いない。

ユニクロを初めとする日本の企業、それに世界中の企業にとってこの低賃金は明らかに魅力です。これも重慶のガイドが言っていましたが、極度に低い年収の中国の民は、中国の中でも大移動を繰り返している。重慶には毎年農閑期になると30万人もの近郊の農家の人々が「担ぎ屋」として働きに来て、その数は30万人に達するというのです。幅1メートルくらいの竹の棒を持って、お客の依頼に基づいて各種の荷物を運ぶ。荷物の種類、距離によって違いがあるが、大体一回の仕事（荷物担ぎ）から得られる収入は2元が標準だということです。つまり、30円です。それでも、農村にいるより現金収入があるから稼ぎに都市に出てきているということでしょう。この手の働き手は、億の単位で居る。

そういう意味では、中国の安い労働力のプールは巨大です。日曜日にテレビを見ていたらある評論家が「中国は年々大きく経済成長していても、労働賃金が上がらない」といった話をしていた。確かにそういう面はある。中国国民全体の賃金水準が上がってくるには時間がかかるでしょう。それは確かです。年8%も成長しているのですが、それでも中国の労働賃金の上がり方は少ない。

しかし、中国の人たちが豊かになっていないかということそれは明らかに違うように思う。例えば、私が中国に行っている間に発表されたようですが、中国の携帯電話普及台

数は1億2000万台と、アメリカを抜いて世界一になったらしい。人口比では少なくとも、数から言えば世界一の「携帯大国」に中国になったということは、なかなか面白い現象です。

日本と同じように、携帯電話の価格は中国でもかなり変動している。しかし、携帯に関しては「依然として高い」と中国人達も言っている。数年前まで一台1000元はしたそうです。つまり、1万5000円。まあ国際価格でしょう。しかし、大卒卒が14万円もらっている国の1万5000円と9000円が初任給の中国の大卒卒卒にとっての1万5000円は意味合いが違う。本来だったら、決死の覚悟での買い物と言うことです。

しかもどうもそうでもないらしい。驚いたのは、中国の人たちが携帯を使うことをそれほど躊躇している気配がないと言うこと。つまり、電話代を普通の支出として受け入れていると言うことです。私は5日間中国にいましたが、本当に周りは携帯電話を普通に使う中国の人たちが溢れていた。

これが何を意味するのか。上海に駐在している高木君の解説が面白かった。つまりこうです。中国の人たちは、公式統計とは別に様々な形で所得を得ているのではないかと。上海で土曜日の昼に彼と結構良いレストランで食事をした。二人で確か350円でした。しかし、そのレストランの顧客は大部分が中国人で子供を何人もつれてきている連中もいた。つまり、彼らの消費力は公式統計が示す数字以上にどうやら高いのです。彼らはレストランの中でも大きな声で携帯を使っていた。

携帯電話だけでも国民10人に一人に行き渡り、それをバシバシ使う国民というのは、例え10分の一であろうと「豊かな消費者を抱えた国」と言えるでしょう。中国が主張するように、「輸入大国としての中国」の素地は徐々に出来てきているという感じはする。繰り返しになりますが、携帯電話がこれだけ伸びると言うことは、他の家電製品などにしても、中国が大きな市場になる可能性は大きいということです。「デフレの震源地」というだけではなく、確かに中国が先進国の企業にとって「競馬を待つ競走馬」を自覚せざるを得ない状況はある。

高速道路網も中国はかなり整備が進んでいる印象です。今回はいろいろな事情もあって、各地の都市でタクシーをかなり使った。二日連続で4時間近く借り切って高速道路を走ったりしたのですが、全運賃（チップ、高速道路代を含めて）が800円とかで安いのです。「車社会」とは言えない。私が乗っている車の前後に一台も車がいなかったことがしばしばあった。主要都市間の高速の整備はかなり進んでいる。片道2車線の立派な道路です。道路が整備されてきたと言うことは、いつか中国も「車社会」になるでしょう。

余談ですが中国の道路で面白いのは、携帯電話をしながらフォルクスワーゲンを運転している連中も結構いるのです。その横を昔の日本で言えばミゼットのような三輪車で干し草のようなものを山盛りにしてゆっくり運転している農家の人もいる、というコン

トラスト。これは次の話に繋がります。

〈 big contrast 〉

では中国の対外収支が赤字になったり、中国全土の労働者の賃金が直ぐに上がり始めるかと言えば、それはかなり時間がかかると予想することが出来る。とにかく中国は「驚くほどの対象性、コントラスト」を持つ国なのです。本音としての資本主義国として突出している部分と、恐ろしいほどの封建制・後進性が同居している、という意味です。これが解消するには相当時間がかかる。

突き抜けていると言えば、本当に驚いたのは上海でカラオケに行ったときです。女性のいるカラオケで、まあ日本で言えば銀座のバーでカラオケをする印象。しかし、顔見せがあるのです。その時に空いている女の子が10人でも並んで、客の前に立つ。選んでくれ... というわけです。選ばれると、その日は客から200元(約3000円)のチップがもらえ、それが彼女らの収入になると言うシステム。

では選ばれなかったらどうなるか。店からは一切のギャランティーがない。逆に洋服の支給代を取られる。ということは、なんとか選ばれないといけないし、一度付いた客には気に入ってもらわねばならない、ということです。基本的には客の隣で一緒に歌を歌う程度のことしかしないのですが、一定のノルマがあって、指名が一定期間に一定回数にいかないとクビになるらしい。人気のある女の子だったら、例えば一晚300元稼いで20日働けば6000元。年間では100万円以上。中国では他の仕事などばかりしくやっていたり出来ない収入がある。人権もへったくりもない超資本主義的なシステムです。

著しい後進性や暴力性も明らかです。今回行った中国の各都市ではタクシーを極めて頻繁に、しかもかなり長距離利用したことは既に述べましたが、どの都市でもタクシーに乗ると分かるのですが、ドライバーのプロテクト措置が大げさに行われている。効果の程は怪しいのですが。上海では、運転手そのものを厚いプラスチックボードが覆っていて、わずかにお金のやりとりが出来る程度の空白しかない。奇妙なのは、助手席と運転席の間も仕切られているのです。

武漢や宜昌のタクシーは、運転席、助手席が一带となって後ろの席と隔てられているという形。その間に何があるかというと、鉄格子なのです。一見して治安の悪さが判る。私は世界各地に行きましたが、これだけタクシーの運転手を徹底して守らざるを得ない状況は、1980年代のアメリカしか記憶にない。なぜか。それはいろいろな人が解説してくれましたが、ヤクザのような連中を含めた不逞の輩の増大です。お金が第一の社会で、建前とは別に凄い社会格差がある。一攫千金を思い描いたら、身近なお金を持っている人を狙う、というのが流行っているからでしょう。

タクシーの運転手も命がけと言うことです。しかし、運転手の偽物も多いらしくて、なぜ判ったかというに乗って暫くするとどの運転手も頼みもしないのに「このホテルか

ら証明書をもった運転手だ」とか、「もう自分は経験が何年もあって、表彰もされているとか」自己証明を行いたがること。目の前に証明書があっても、改めてそれをやる。

後進性と言っていいのかもっと驚いたのは、今でも「人身売買」が結構頻繁に行われているというのです。しかも、都会で拉致されて、そのまま売春婦にされたり、嫁も来ない農村に売られたりするらしい。農村に売られた女性は、夜は檻に入れられるというのです。逃げないように。これは最近重慶に行った高木君から聞いたのですが、街に看板が立っていてそこには、「最近婦女子の誘拐が多いので注意しろ」と書いてあったそうです。日本では誘拐は金銭目当てですが、中国ではそのまま売ってしまうらしい。

話を少し本題に戻しましょう。先ほど携帯電話の話をしました。中国製はほとんどなく大部分が米欧のメーカーが支配している世界なのですが、中国がどういう措置を取っているかを見ると、この国が容易に「輸入大国」になるのは難しいことが分かる。

これは上海の長谷川君から聞いたのですが、最近中国政府は携帯電話の部品調達比率の引き上げを通達したというのです。つまり中国で携帯電話を売りたいかったら、一定部品を国内調達しろと言うものです。中国国内にはそういう部品メーカーはないわけだから、それぞれのメーカーは関連部品企業の中国進出を促さざるを得ない。当然これら企業の対中投資は増え、雇用も生まれる。つまり、何かの商品の輸入が増加するとしても、規制やルールを設けて一方的に輸入が増加しないような措置を取っているということです。

WTO 加盟で中国が今後どう変わるかは、大きな関心項目です。こうしたグローバル経済への組み込みの中で、中国は徐々に変わってくるかもしれない。しかし、中国の消費者が豊かになって購買力が付けば付くほど、中国の世界経済におけるステータスは増大する可能性が強い。そういう意味では、「中国脅威論」は中国側の否定にもかかわらず、今後もくすぶり続けるでしょう。

こうした中で、中国の通貨「元」を巡る議論は今後高まるでしょう。中国が輸出入で巨大になればなるほど、その国の通貨の水準は世界経済全体に大きな影響を与える。今回の中国への旅を通じて、そうした印象を持ちました。

今週の主な予定は以下の通りです。

- | | |
|----------|--|
| 10日(月曜日) | 欧州連合ウクライナ首脳会談
東証での不動産投資信託(REIT)取引開始
8月の日本の卸売物価指数
8月の日本の工作機械受注額
7月の機械受注 |
| 11日(火曜日) | ASEM 経済省会合 |
| 12日(水曜日) | 塩川財務相・柳沢金融相がオニール財務長官と会談 |

	8月の対内・対外証券投資
	4～6月の米経常収支
13日（木曜日）	WTO 中国加盟作業部会
	9月の月例経済報告
	ECB 理事会
14日（金曜日）	8月の米卸売物価指数
	8月の米小売売上高
	8月の米鉱工業生産・設備稼働率
	7月の日本の鉱工業生産

ニューヨークの株式市場は、引き続き下値不安の強い展開が予想されます。景気の先行き、特にこれまで経済を引っ張ってきた消費の先行きに対する懸念が強い。今週は週末に関連統計が発表される。銘柄別で見ると、かなり割安な値段になってきたものもある。しかし、自立的な反発はあるでしょうが持続的な反発は予測しがたい。

ドルも下値不安が強い展開でしょう。日本の場合は、国内経済も悪いので一方的なドル安・円高はないでしょうが、それでもドルが持続的に高値を追う状況ではない。

《 have a nice week 》

中国に行ったのはこれで4回目でしょうか。しかし何度行っても、「3000年の歴史」と言われる割には、本場の中華料理は推薦できるものではなく、はるかに香港や東京の方が美味しい。やはり味が死んでしまったのでしょうかね。文化大革命の時などに。

食というのは豊かさの一定期間の持続の中で作り上げられるものですから、一朝一夕には戻らない。重慶の貧しい民を見れば、国全体が豊かになるのは時間がかかると分かるし、彼らの舌が肥えてくるのにはもっと長い時間がかかるでしょう。

本文でも書きましたが、大きな都市をいくとも訪れました。しかし、「大都会」としての可能性を感じたのはやはり上海です。この都市は、私が行ったどの中国の都市とも違う。まあアメリカで言えばニューヨークでしょうか。他と違う。有名な川縁の景色を見に M on the Bund (<http://www.m-onthebund.com/>) というオーストラリア人経営の店に行きましたが、この店は非常に雰囲気があって良かった。まあ、カンパリソーダは作れても、ワインクーラーは作れなかったといった従業員教育の問題はありましたが。

聞いていたスカイスクライパーは、新宿など比ではない大規模なものでした。開発が進む浦東の周辺も、まだまだ可能性を感じることができた。今すぐにでも、もう一度行ってみたい都市です。「上海だけを見て中国を理解したら間違い」と言われたと昨日のテレビ番組で平沼・経済産業大臣が言っていました。確かにそれで私が宜昌から山峡ダムの建設現場に行く途中で目にした農村部の人たちの生活ぶりとは隔絶している。しかし、今後面白い都市になることは間違いのない気がする。

それでは、皆様には良い一週間を。

《当「ニュース」は、住信基礎研究所主席研究員の伊藤（ 03-5410-7657 E-mail ycaster@gol.com ）が作成したものです。許可なき複製、転送、引用はご遠慮下さい。また内容は表記日時に作成された当面の分析・見通しで一つの見方を示したものであり、売買を推奨するものではありません。最終的な判断は、御自身で下されますようお願い申し上げます》